

# 本学の伝統と文化が息づく、 ドッグセラピー「慈恵犬」の 取り組み



総合医科学研究センター・実験動物研究施設・施設長  
(熱帯医学講座・講座担当教授)

嘉糠 洋陸

毎週木曜日のお昼頃になると、新外来棟の新橋側の出入り口に、3頭の犬がやって来ることをご存知だろうか。「慈恵犬」と名付けられた彼らは、外来患者の方々やそのご家族を出迎え、愛嬌を振りまきながら、人々に癒やしを与えている。撫でられる彼ら自身も嬉しそうである。この「そらまめ」(メス六歳)、「ナッツ」(メス四歳四カ月)、「ボス」(オス六歳六カ月)の3頭は、単なるお客さんではなく、正真正銘の本学の一員として、本学独自のドッグセラピーの中心を担っている。彼らは、建学の精神に沿って患者のために活動する、私達のれっきとした仲間なのである。

ドッグセラピーとは、人々が犬と触れ合うことによって、精神的や情緒的安定、または身体的な運動機能回復効果を得られることを目的とした活動全般を指す。このドッグセラピーは、活動動物介療法と動物介在活動とに分けられる。前者は、医療従事者の主導で実施される、患者の社会・情緒・生理・認知機能を改善する効果を持つ、治療法のひとつである。一方で、後者では、動物とのふれあいを通じて生活の質の向上を目的とする。馬やイルカに比して、犬はセラピーアニマルとしての歴史が古く、小児科や精神科、緩和ケア科等の様々な診療科で受け入れられている。触れ合いの際に、視線を介したオキシトシン分泌促進が人間と犬の双方で起きることが明らかになるなど、科学的な知見も増えている。

近年、日本でもドッグセラピーが注目されるようになり、聖マリアンナ医科大学附属病院や埼玉県立小児医療センターなど、様々な医療機関で導入されるようになった。しかし、その多くが外部のドッグセラピー団体等に依頼している都合上、その回数が限られ、費用も発生する。そのため、治療や臨床研究に必要な、サステナビリティにどうしても欠けるきらいがあった。本学附属病院でも、以前から小児科病棟で日本動物病院協会(JAHA)のドッグセラピーを実施していて、長期入院の患者や付き添いの家族のQOLの向上に役立つ可能性が指摘されていたが、約2ヶ月に一度という回数の少なさがネックになっていた。

大学1号館の地下1-2階部分に、総合医科学研究センターの実験動物研究施設がある。ここでは、マウスやラット、ブタなど様々な実験動物が飼育されていて、職員10名・専任教員3名(うち獣医師2名)により、365日休みなく稼働している。この施設には、大変立派な犬舎がある。十分な大きさの犬用ケージが専用飼育室に設置されていて、15頭を同時に飼育できる。

しかし、動物愛護の考えの浸透から、本学では犬を使用した動物実験はもう長いこと行われていない。であれば、本学のヒト・モノを有効に活用することも併せて、ドッグセラピーのための犬を独自に飼育できるのではないかと。私が施設長になって、犬舎を眺めながらそう思い立ったのが、「慈恵犬」の端緒である。

本学と犬の関わりは大変古く、実は学祖・高木兼寛にまで遡る。1884年の練習艦「筑波」の航海による、脚気栄養説の臨床研究の真っ最中に、学祖高木は犬を使った脚気モデルの作出に取り組んだ。犬と人間が同じ原因で同じ病気を発症するという概念がない時代に、「世界初の栄養疾患モデル」に挑戦した学祖の慧眼に恐れ入る。実験は、脚気食群3頭、健康食群3頭の組み合わせでおこなわれたが、それらの犬の世話から観察、そして死後の解剖に至るまで、海軍所属の軍医教官5名に“誠心誠意”で当たらせたと記録がある(犬と寝食を共にするレベルだったらしい)1)。実験に参加する犬に対する、学祖の慈愛が垣間見える。

森田療法でも、犬が大きな役割を果たしている。森田療法は、本学の精神医学講座初代教授の森田正馬によって生み出された、神経症に対する精神療法である。治療の後半では、患者は作業療法のフェーズに入り、動物の世話、園芸、陶芸、料理など様々なことに取り組む。1920年に、森田宅に患者が下宿する形で森田療法が開始され、この時に犬の飼育が始まったとされる。第三病院にある森田療法センターでは、今でも犬が常時飼育されていて、犬の埋葬までもが患者の療法の一環となっている2)。森田療法では、犬はあくまで患者による作業の対象ではあるが、患者の治療への貢献という側面で見れば、100年以上続く日本最古のドッグセラピーと言えるだろう。

2015年、実験動物研究施設においてドッグセラピーの構想を立ち上げた。本学で飼育する犬の候補として、ペットショップ等で犬を購入することは鼻から念頭に無く、保護犬を対象にすることにした。当初は都に相談したが、法人へ保護犬を譲渡した実績はない、とけんもほろろ。時間を掛けて各自自治体をあたったところ、人づてで行き着いた福島県郡山市保健所がこちらの趣旨に大いに賛同し、保護犬を譲渡してくれることになった。果たして2017年、私の自家用車で福島まで迎えに行き、一匹の子犬を譲り受けた。随分と怖かったのか、その子は車の座席の下に潜り込んでしまったことをよく覚えている。それが今の「そらまめ」である。その後「ボス」が、次いで「ナッツ」が郡山市から譲渡された。



新外来棟前での患者とその家族のお出迎え風景。小島博己附属病院院長(左)がそらまめを、らんぶの会のハンドラーの方がボスをエスコートしている。



熱帯医学講座でくつろぐ、3頭の慈恵犬。前からボス、ナッツ、そらまめ。

ドッグセラピーに必要な犬の資質は巷ではいろいろと言われているが、本学の場合は「人を噛まなければよい」をボトムラインとした。世の飼い犬は、特殊なトレーニングを受けずとも人と共存しているからである。この3頭はその後、実験動物研究施設の職員らに丁寧に飼育・馴致され、順調に成長した。保護犬の譲渡条件のひとつは、最後まで面倒を見ることである。彼らの終の棲家は、本学なのだ。施設職員と一緒に朝晩に散歩する姿は、西新橋付近の人々にちょっと知られた存在となった。2019年、人前に出せるだけ十分に成熟したと判断し、病院運営会議を経て、法人運営会議にてドッグセラピーの実施が承認された。「慈恵犬」の正式な誕生である。

ドッグセラピーでは、病棟等での犬と患者の触れ合いが中心になる。そのため、犬のハンドラーの存在が必須である。飼育を担当している実験動物研究施設の職員らは、通常業務があるため、セラピーでのハンドラーを務めることまでは適わないことが当初より課題であった。その話を聞いて立ち上がったのが、公益社団法人東京慈恵会に所属する、教授令夫人の有志の方々だった。慈恵犬のためのボランティア団体「らんぶの会」(代表:井田尚子さん)を設立し、ハンドラーとしてトレーニング役を買って出るだけでなく、慈恵犬のアピールの活動も精力的に展開している。設立から3年にわたり、週一回の活動を欠かさず実施し、今や3頭の“お母さん”役として欠かせない存在である。小児科病棟とウェブでつながりリモートセラピー、そして冒頭の新外来棟でのお出迎えは、らんぶの会が企画・立案

## 参考文献

- 1) 松田 誠「高木兼寛の犬脚気の研究とこれに協力した海軍軍医たち—世界最初の疾患モデルの研究—」東京慈恵会医科大学雑誌 112(2): 301-311 (1997)
- 2) 矢野勝治「森田療法における動物飼育の意義」精神経誌 112(6): 581-584(2010)



実験動物研究施設の職員。朝夕の散歩、食餌、シャンプー、体調管理、犬舎の清掃など、365日体制で3頭の世話をしている。



らんぶの会の皆さん。毎週木曜日に、3頭のトレーニング、散歩、リモートセラピー、新外来棟でのお出迎え、各種グッズ作成など、精力的に活動をおこなっている。オレンジ色のエプロンが目印。

して実現したものである。

東京慈恵会の正会員は女性のみで、慣例として本学の教授令夫人もしくは女性教授である。その由来は、明治時代に皇族や貴族の夫人で構成された「婦人慈善会」にまで遡る。婦人が中心となり、鹿鳴館で日本初のバザーを行い、その収益金を学祖高木兼寛が設立した有志共立東京病院に寄付した。その後、婦人慈善会は発展的に解散し昭憲皇太后から賜った「慈恵」の言葉を冠した東京慈恵医院に深く関与することになる。日本で初めての婦人による社会慈善活動をおこなった、その精神の一端が、百数十年後に「らんぶの会」へと姿を変えて、綿々と続いていることに感嘆の念を禁じえない。

2022年に始まった、新外来棟での彼ら3頭によるお出迎えは、またたく間に患者とその家族、そして本学教職員に知られるところとなった。それどころか、多くの慈恵犬ファンが生まれ、わざわざ時間を合わせて会いに来てくれる人まで現れるようになった(栗原敏理事長もそのお一人である)。彼ら3頭自身も、これを週一回の“お務め”として認識している様子すら伺える。多くの本学関係者の協力で生み出された、本学独自のドッグセラピー「慈恵犬」は、ピースがひとつでも欠ければ成り立たなかった。構想から足掛け7年、コロナ禍が終われば、当初の目的のひとつである病棟でのドッグセラピーがいよいよ始まる。颯爽と歩く彼ら3頭を見かけた時、慈恵の仲間として声を掛けてもらえたら幸甚である。